

## 立山をめぐる森・里・海の「こころ」文化

講師 前富山県[立山博物館]館長

米原 寛 氏

富山湾は今年「世界で最も美しい湾クラブ」に加入が認められました。雨晴海岸から望む海越しの立山連峰の写真がことあるごとに使われるように、富山を代表する優れた景観のひとつであるといえます。なぜ優れているかと考えると、ひとつには目で見る美しさとうのが当然あります。しかし、目で見るということだけであれば、県民の深い感動も、全国あるいは世界の感動もそれほど高いとは思えないのですが、見えない不思議な力がそこから感じられるということが、さらなる感動をあたえているのだと思います。海を見ながら先に山があるというこの景観の背後にあるものを、今日はお話ししたいと思います。



### 富山の地形・中央からの「文化距離」

富山県は北には海に面し、東側から南にかけて立山連峰から連なる飛騨山脈があります。西部には五箇山、あるいは井波の八乙女、福光の医王山、もう少し海寄りには石動山といった山々があり、この山と海に囲まれた形が富山の「こころ」を育んだといえます。山と海があり、両者を川がつなぎます。富山は山と川と海がひとつながりになった地形で、そこにひとつの文化を作り上げています。川は、水が山から流れ下りてくるだけではなく、海を廻って入ってきた文化が、川を遡って広まっていくという、「文化の遡上」が見られます。

陸伝いに富山に文化が入ってくる時、西は金沢を経て富山へ到達する、あるいは南は飛騨を経て、またあるいは東は糸魚川方面より到達するという、3つのルートがあります。ただし、古くは陸路だけではなく、海から入ってくる文化も多いわけです。海の文化の恵み、それが川を遡って山の麓に入り、山の麓では山が作り出した精神世界を形にしたものが作られていきます。したがって、山と海、つなぐ川、そしてこの平地と山の境目にある里、あるいは森といったものがひとつになっていると考えます。我々が自然に向き合った時の心の持ち方もまた「文化」いえます。

## 富山の風土が県民性を育む ー立山が作り出す富山の「こころ」ー

立山が富山に住む人々にもたらしたものは何かといえ、まずは空にそびえる雄々しさから精神的シンボルとしての存在感です。さらには地獄谷を代表とする「地獄思想」の景観、そして信仰心の篤さ（真宗王国）、これらは「内観思想」、つまり自分の心の中をよく見ることによって自らを律するという、こころの世界を立山が育ててきたといえます。見えないものに対する畏敬の念が非常に強く、具体的にいえば我執に囚われない謙虚さ、他力の尊重、利他の精神などが、立山がもたらした精神性といえるでしょう。これが海、あるいは里といった立山をめぐる富山のエリアに広がっていきます。

例えば、利他の精神は「売薬」の精神です。「薬を売る」のではなく、まずは「私を売る」、私を相手に信用してもらい、その信用が薬の信用につながるという世界です。相手を生かすことによって結局自分が生かされているという「利他」の世界です。これは他力の尊重とも重なります。つまり自分の力の限界を知り、自分の力を越えたものに対して畏敬の念をもつ、これが見えないものに対する畏敬の念というものにつながります。つまり、立山という大自然が持っている力に対して我々は謙虚になるのです。我執に囚われず、自分を越えた世界を認めることによって謙虚になる、謙虚が他力の尊重と利他の精神につながっていくという、これが立山がもたらした精神性のひとつの成果です。

これらの立山がもたらしたものの背後には、もうひとつ、荒々しく妖気に満ちた立山山麓の森の存在があります。現代ではバスで気軽に登ることのできる立山山麓ですが、かつては登っていく中で不思議な自然の妖気を感じながら、自らの無力さ、そこに見えないものに対する畏敬の念というものが育まれていったのだと思います。

次に、里や川がもたらしたものは何かといえ「共同的精神」です。氾濫や洪水といった災害に対する中で、新しいものをとりこんでいく進取の気性、実利実学的な考え方、辛抱強さ、機会を察知する力、そして団結力が生まれます。一人の力では無力な氾濫や洪水を、大きな集団の力によって乗り越える、その集団の力の中で機会を察知するという力が生まれ、その機会を狙う辛抱強さを持ち、具体的に科学的精神で実学的に洪水を乗り越えてきました。そしてその技術を取り込む進取の気性がありました。

たとえば常願寺川、神通川、庄川といった流域での氾濫の乗り越え方、これはひとつの村だけでなく、流域の村々が団結して乗り越えてきた歴史として現れています。そして機会を察知する力、つまり科学的な目をもって自然を読むという力です。実利実学的というのは、たとえば江戸時代、多くの河川改修に携わった石黒信由に代表されるように、科学的・実学的に河川を測量し、土木工事を行う技術を身につけていくという力です。里や河川がもたらしたものは、精神性とは別に、実学的な、人が生きていくための力なのです。

では、海は何をもたらしたかといえ、「祈りのこころ」です。富山県において、神々はどこから我々のほうにやってくるかといえ、海から来る、船に乗ってくるのです。日本では神々は山から下りてくるという思想があります。ですが山から里へ降りてくる時も神々を運ぶ乗り物は船なのです。二上山の射水神社の築山神事では、山頂に降り立った神々が船（御船代）で里へ降りてきます。放生津八幡宮の築山神事にも御船代が用

いられます。あるいは「ボンボコ祭り」という儀式の中にも船の形をした神座が用いられます。神々の乗り物は船であり、船というのは、見える見えないは別として、海という大きな世界の中で考えることができる乗り物です。そのようにして、海がもたらしたものは「祈りのところ」すなわち神々を迎える「まつりのところ」なのです。

もうひとつ重要なのは文化伝播のルートとしての海です。富山は出雲の文化が伝わっている東端にあたります。現在、富山大学医学部のある杉谷には四隅突出型古墳というものがあります。これは西から海のルートを経て入ってきた出雲文化によるものです。「大黒さん」とか、海では「えびすさん」とよばれる、「えびす」をまつる出雲文化も日本海側では富山県でとまっています。東からは何が来たかといえば、出羽羽黒の修験思想がやってきます。その影響も海の祭り「ボンボコ祭り」の中にみとめられます。つまり海は文化伝播ルートをつくり、そこには「神々を迎えるところ」があり、これが海の祭りとして盛んに行われているのです。

あとは、辛抱強いとか機会を察知する力がないと漁業もできません。洪水に対応する里人の団結力と同時に、海人の団結力という点からも、富山はひとりひとりの力を誇示するという風習は少なく、比較的、集団・集合的な世界なのです。特に金沢と比べると対照的で、例えば江戸時代以降の文化を見ると、金沢は基本的には個別的・家元的な文化が中心です。家元を中心とする三角形のヒエラルキーを構成して、上下に各々の段階がありますが、富山はそのようなものはあまりありません。富山はだいたいにおいて集合的文化・集団的文化が盛んだといわれます。集団の力というのは自然というものに向き合って生まれてきた力です。その自然というのは立山をめぐる海と、川と、そして里ということになるわけです。

### 海・里・山に囲まれた自然景観を歌で都人に知らしめた大伴家持

1200年前、大伴家持が国司として越中に赴任したのは29歳の時、まだ若く、もっとも感受性が強い時期に富山に赴任していました。在任中の5年間で215首を詠み、在任以前、以後と比べて数も多く、優れた歌が作られています。彼の歌の優品はほとんど越中で詠まれた歌であるともいわれています。それは、越中の自然、海、そして山、森というもののすばらしさを、歌で都人に知らしめたということになります。

・・・み雪降る 越と名に負へる 天ざかる 鄙にしあれば 山高み 川とほし  
ろし 野を広み 草こそ茂き 鮎走る 夏の盛りと 島つ鳥 鶺鴒が伴は 行く川  
の 清き瀬ごとに 篝さし なづきひ上る 露霜の 秋に至れば 野もさはに 鳥  
集けり・・・

(みゆきふる)越という名を負う(あまざかる)鄙の地であるから、山は高く川は雄大だし、野が広くて草は生い茂っている。鮎が躍る夏の盛りには、(しまつとり)鶺鴒たちが、流れゆく川の清らかな瀬ごとにかがり火を焚きながら川をさかのぼって行く。(つゆしもの)秋ともなれば、野原いっばいに鳥が集まっている

これは家持がトータル的に越中の自然をとらえている歌です。「山高み・・・鳥すだけり」というこの文章が、越中の自然全体を端的にうたっています。彼はこういったトータルをつかみながら、海、川、山といった個別にもたくさんの歌を詠んでいるわけです。

「みゆきふる」というのは「越」にかかる枕詞ですが、雪と組み合わせた非常に美しい言葉で表現しています。これが都人に感動をあたえたひとつの歌になります。

国司として赴任した家持は、当時の越中、現在の富山県から能登半島までを巡行、つまり、自ら徴税使として税金を徴収するための田畑の出来具合などを見て回っています。その中で彼が見た自然景観全体の中から、またそれぞれの海や山の歌を作っているわけです。そして自分の見ている自然観、これは奈良の都とはまるで違う自然観なのだと彼は考えています。

### 立山の賦

あま 天ざかる 鄙に名かかす 越の中 国内ことごと 山はしも しじにあれども  
 かは 川はしも さはに行けども すめ神の 領き坐す 新川の その立山に 常夏に  
 し 雪降り敷きて 帯ばせる 片貝河の 清き瀬に 朝夕ごとに 立つ霧の 思ひ過ぎ  
 がよ めや あり通ひ いや年のはに よそのみも ふりさけ見つつ 万代の 語らひぐ  
 さと いまだ見ぬ 人にも告げむ 音のみも 名のみも聞きて ともしぶるがね

(あまざかる) 鄙の地のなかでも名高い越中の国中のいたるところに、山は数々あり、川はたくさん流れているが、国の神が鎮座されている、新川郡のその名も高き立山には、夏だというのに雪が降り積もっていて、山裾を流れる片貝川の清らかな瀬に朝夕ごとに立つ霧のように、この山を忘れることなどあろうか。通いつづけて、ずっと毎年、遠くからでも仰ぎ見て、万代の語りぐさとして、まだ見たことのない人にも話そう。噂だけでも名前だけでも聞いて、うらやましがるように。

その中で、立山を詠んだこの歌は、家持が天平 19 年 (747 年) に税帳使として都へ行く時に作られたもので、越中の自然や立山のすごさを伝えようとしています。そして最後の部分では、この世界をいつまでも語り草としてほしい、越中の世界をまだ見たことも聞いたこともない人々をも羨ましがらせよう、とうたっています。これは家持の越中に対するひとつの賛歌であり、これがあるから彼の越中に対する思い入れというのが良くわかるわけです。

「すめ神の 領き坐す 新川の その立山に」という部分、「領き坐す」というのは支配するという意味ですが、立山が神意、神の意識を持っている、神々が立山にお住いになっていると表現しています。家持はここに「立山の賦」と書きましたが、『万葉集』の中でこの「賦」をつけた歌は、長歌 3 つしかありません。3 つとも越中で詠んだ歌、「立山の賦」、「二上山の賦」、もうひとつは氷見の「布施水海に遊覧する賦」の 3 つです。「賦」というのはすばらしい、びっくりするような自然を自分の目の当たりにしたときの感動を歌にしたときにつけています。そういう意味では越中の自然が「賦」をつけるほど家持に感動を与えたということになります。越中の山、森、里、川、海、いずれをとっても彼の詩心をくすぐるものだったのです。

立山に 降り置ける雪を 常夏に 見れども飽かず 神からならし

立山に降り置いている雪は、夏のいま見ても見あきることがない。神の山だからにちがいない。

この歌の「神からならし」という言葉、立山には神々がお住いになっているということから、山を拝むことによって神を拝むという遙拝信仰に通じるものがあります。立山信仰は平安時代中期以降に生まれましたが、これは遙拝信仰ではなくて実際に立山に登

ることで功德を積む<sup>とはい</sup>登拝信仰なのです。いわゆる信仰と呼ばれるものでなくとも、富山県民は、朝な夕なに立山に向かうと自ずから手を合わせたくなるものです。それから山の姿を見る、雪形などを見ることによって農耕の暦とする、そういう意味では「神々のお住いになる」というのは、古くからあった山に対しての遙拝信仰を表しているのです。ただし、その対象である「立山」は、家持の時代には雄山ではなかったと考えられています。おそらく劔岳が立山遙拝信仰の対象の中心であったと思いますが、あるいは毛勝三山であったと考える人もいるようです。

### 海のころろ ー越国と日本海交易ー

海は文化を運ぶという重要な役割を担っています。そして海という自然に対する畏敬の念の対象でもあります。歴史上、その海を操ることで権力が生まれてくる、それが越中の文化を広め、高めていくということになります。

古代の日本海交易で鉄剣などが大陸から伝わり、富山に入ってきます。逆に境や糸魚川で採れた翡翠石が輸出されます。朝日町の工房で作られていた翡翠の勾玉などが全国に送り出されていました。海辺ではこうした輸出入を中心とした交易が盛んに行われていたと考えられ、ひとつのキーステーションが古墳になります。

氷見市に日本海側最大の前方後方墳<sup>やないだぬのおやま</sup>「柳田布尾山古墳」があります。現在では海の汀線はずっと下がって遠くに引いていますが、当時の汀線は古墳の間近まで迫っていました。この場所に築かれた小高い古墳は、この平野一帯を治めているという権力の誇示になりますし、文化を掌握しているというデモンストレーションにもなります。つまり古墳はその地域の有力者が葬られているというだけでなく、この地域に集積された文化を、この古墳に見てとる必要があります。

現在の氷見平野は、かつては広大な潟湖で、外海の富山湾との境には砂州がありました。砂州には船をとめて港となり、集落が発達し、海人たちの拠点になっていたと考えられます。

富山大学医学部のある杉谷の古墳群から見つかった「四隅突出型古墳」は、四角形の四隅に出っ張っている部分がある形の特徴的な古墳です。これがいわゆる「出雲型」の古墳で、富山は分布の東の端にあたります。もちろん富山には前方後円墳などの「大和型」の文化もはいつてきています。大和型の大きな力も入るのですが、海の交易ルートの中でもたらされた出雲型のものも存在しているというわけです。四隅突出型古墳の分布は日本海側に集中しています。そういったことから海は文化伝搬の重要なルートであり、富山は日本海側の中でも出雲文化を受け入れる非常に有力な場所でした。そして、海から入ってきた文化は内陸へも広がりを見せるわけです。

### 神を迎える祭り ー祭りを見る海と山ー

第2回の講座で松山先生もお話をされた、神々を迎える祭り、放生津八幡宮の築山神事です。祭りの背後には山が存在しています。具体的な山を指すのではなく、いわゆる精神的な山、築山<sup>つきやま</sup>です。築山とは、たとえば何か憑きものがあるとか、身体に魔が憑く

といった字（憑き山）をあてるのですが、神々がお住いになる、お出でになる神聖な場所のことを築山といいます。神輿の台にのせた舟形の御船代にお移りになった神々が鎮座する場所が築山です。それは恒常的なものではなくて臨時的なもの、祭りをする時だけ拵える神々の座なのです。このような形が祭りの中でそのまま古代から現代にまでに伝えられてきているわけです。

神迎いの儀式は、別火べつかと呼ばれる迎え火を焚き、神道なのだけれども護摩壇という真言宗的な儀礼の中で進められていきます。祝詞の奏上とともに、海から迎え火を目印にしてやってきた神々が御船代にお入りになります。その次に、まだ人形や幕といった飾り立てをしていない骨組みだけの築山に護摩壇を焚いて御船代を安置し、そこから神々は築山の後ろの松の大木に寄り付きます。そして松の木から下に降りて来て、壇上の唐破風からはふの御殿の中の神籬ひもろぎという常盤木ときわぎ、今でいえば榊の枝に神々が降り立ちます。ところが神々の姿は見えないので、ここに見える神（人形）を設えます。「おんぼさま」と呼ばれる姥神で、顔は鬼女の面をかぶり、白い着物に打ち掛けをしています。そして片足がありません。これはおそらく浮いているという発想で、今まさに後ろの大きな木から神籬に降りてくる瞬間の世界をこのような人形に現したのだらうといわれています。この人形に魂を入れているというのが築山行事ということになります。

壇上の四隅には、持国天じこくてん・増長天ぞうちょうてん・広目天こうもくてん・多聞天たもんてんの人形が配され、このステージ、つまり神々が鎮座するステージを護る守護神になります。神々が仏教の四天王にお祀りされている、まさしく、日本的な神仏習合しんぶつしゅうごうの世界です。そしてこの四天王もが神籬に降りてきた、この神によって新しい命を吹き込まれているという発想です。つまり仏教の四天王が、神々の力によって命を吹き込まれるという論理なのです。

この神々がさらにもう一度御船代に戻り、それが神輿として町をねり歩く、その神輿の先導に13基の曳山が引き回されるというのが放生津曳山祭の本来の姿です。現在ではもう御船代はなく、曳山だけが回っています。

## 海の神に航海の安全と豊漁を祈る

「ボンボコ祭り」は漁師たちが安全と豊漁を祈る祭です。祭礼の中で法螺貝と太鼓と横笛で演奏し、特に太鼓の音が「ボンボコボンボコ」と聞こえるので「ボンボコ祭り」といいます。射水市（旧新湊町）西宮神社の祭礼で、ご神体である海の神様「えびす」をあえて海にお連れしてもてなし、そして豊漁や安全を祈願するという儀式です。

神社から御船代に遷された神は港に向かい、御座船（神輿船）に安置され、大漁旗を掲げた船団を従えて沖に向かいます。たくさんの旗が翻った様子が非常に美しい光景を作りながら海の中で行われる一種の「神迎え」であり、そして神にお供えしんせん（神饌）をしてこれからの豊漁や安全を祈るという祭りです。神饌は野菜や魚を京都四条流という包丁の流儀のもとでさばき、それを海に投げ込みます。それが海の神に供えるということになるわけです。

海にはそれぞれの網元の漁場があり、その一番先端を「あどあど」（網統）といいますが、その「あど」と呼ばれる場所に行き、そこで祈祷の文言が書いてある木の札を海に沈めて

祭文を奉納します。神饌の奉納のあと、面をつけた「ボンボコ舞人」の踊りを披露して神々に楽しんでいただく、この踊りを奉納することによって安全と豊漁を祈念します。

舞人のつける鬼の面や背帯しゅくこうという腰に当てる面には魔を払うという意味があります。頭には金色の冠をかぶり、狩衣を着て、手に大きな弓を持ちます。そして胴体にはえびす神の象徴である紋が描かれたものを巻いています。舞の中では、まず弓を釣竿に見立てた仕草をして「豊漁」を祈ります。それから弓で矢を放ち、それによって「魔が払われた」ということになります。最後は、腰に帯びた太刀の鞘を使い「ぱちんぱちん」と音を立てて魔を完全に払います。これらの動作が法螺貝と横笛と太鼓のリズムに乗って行われます。

この「ボンボコ祭り」は修験の祭りにルーツがあり、秋田の「なまはげ」等と同じルーツを持つといわれています。つまり、東北から来た修験の祭りが富山に来て、海の神の祭り合体し、「ボンボコ祭り」として現代に伝えられています。

### 劔岳遙拝信仰 —立山に向き合い、抱かれる—

海は神道、神々の世界として展開したのに対して、山は仏教の世界として展開します。つまり、富山は海における神々の魂迎えという世界と、立山を中心とする人間の罪と、それに基づく報いといった仏教的な世界の中で展開していきます。立山の遙拝信仰は神々の世界に対するものなので、これはまだ神道的ですが、平安時代、修験者などの登拝する登拝信仰になると完全に仏教の世界になります。立山に向き合い、抱かれるという、山を見ることで生まれてきた信仰は、厳密に言えば劔岳信仰でした。雄山山頂の社殿、あるいは別山の社殿の方向（方位線）はいずれも劔岳に向っています。つまり立山信仰の原点は劔岳信仰であるということを暗に物語っています。

明治40年、劔岳登頂に成功した際、陸軍陸地測量部・柴崎芳太郎は山頂に錫杖頭と鉄剣を発見しました。錫杖というのは山に入る時、持って行って魔を払う杖です。錫杖頭には本来、金属の輪がついていて、輪が動いて鳴る音で毒虫や悪を持った動物が退散するというものなのですが、山頂で発見されたものには輪がありませんでした。調べてみると、奉納された時には既に無くなっていたのだらうということがわかりました。これが作られたのは奈良末から平安初期、奉納されたのが平安末、その間に錫杖として使われながら輪が無くなっていき、そして錫杖頭だけが奉納されたのだらうと考えられます。

鉄剣と対になって発見されましたが、実際には同時に奉納されたのかどうかはわかりません。しかし、この錫杖頭と鉄剣の間隔は25cmで同じ方向に向かって並んで安置されていました。それには何か意図があるのかもしれませんが、まだ今のところわかりません。これがひとつの、劔岳信仰の仏教的な世界の中で展開する遺物です。

劔岳信仰がいつ頃成立したものなのか、はっきりしたことはわかりませんが、里の神社の「いわれ」などから考えると、仏教が入ってくる前の段階、奈良から平安の初期にかけてではないかと考えられています。また、「劔」というのは仏教における、「魔を払う劔」の意味ともとらえられます。立山町の日置神社（※現在、日置と日中に2社あり、おそらく論社ろんしゃと考えられている）、上市町の神度神社（神渡神社かみわた）、日石寺などが劔岳の神々

をお祀りしています。日石寺の本尊である磨崖仏は岩に巨大な不動明王像が彫りこまれたもので、脇の阿弥陀如来像は同じ岩に後に追刻されたものであることがわかっています。このような劔岳信仰の最初は劔岳にお住まいである劔神を祀る神道であり、平安時代の終り頃には修験者が護持する不動明王という仏教的な密教に入っていく、それからさらに阿弥陀の世界が加わっていくという過程が見えてきます。

### 立山山麓に見る祈りのころ ― 経塚に託す功德の思い ―

立山の山麓、豊かな森の中で育まれた信仰として、上市町黒川遺跡群の経塚があります。遺跡から少し山を下った黒川の集落からは劔岳が良く見えます。円念寺山というところに経塚が 34 基、細い尾根に横一列に並び発見されました。もちろん劔岳の方向に向いています。塚の中には経塚の魔を払うという意味で独鈷などもありました。そして法華経の入った経筒は珠洲焼で、だいたい中世、13 世紀から 14 世紀、早いもので 12 世紀の後半頃のものと考えられます。

### 里のころ ― こけら経に託す功德の思い ―

つい最近話題になった黒部市のこけら経の遺跡は、立山を見渡す平野部にあります。「こけら」というのは木端<sup>こっば</sup>という意味ですが、幅が約 1cm、長さ 20 から 30cm と細長く、厚さ 0.4mm ほどの薄い木の板にお経が書いてあり、法華経と理趣<sup>りしゅきょう</sup>経のものがみついています。

黒部市の西部、海の近くに位置する堀切遺跡の一部、かつて水場だったと思われる場所のわずか 2m×1m の範囲内で大量のこけら経が発掘されました。全国で 106 ヶ所のこけら経遺跡を調べたところ、畿内、特に京都のあたりでは大きな寺に奉納されたものが多いのですが、民間のこういった水田しかないような場所に出てくるものはほとんど無く、貴重な事例であることがわかりました。しかもその数は、欠片なども含めると 2 万点を超え、発掘されたものでは日本で最も多い数なのです。時代はだいたい古代から中世と考えられます。

こけら経は上部が三角に切られた卒塔婆<sup>そとぼ</sup>の形で、ここに法華経の文言が書いてあります。法華経を書き写すことを「書写」といい、修行のひとつとされています。民間の人たちが集まって法華経をこけらに書き、そしてそれを今度はお経を読んで清めてもらいます。だいたい 20 から 40 枚を束にして、終わったものを水場に持って行き、埋めています。この一連がひとつの法華経の供養であり、仏道修行なのです。そしてこれは立山連峰を見渡せる場所で行われているわけです。

この堀切遺跡のこけら経からは理趣経もみついています。理趣経というのは真言関係のお経です。空海から始まって真言を唱える、つまり、梵字がたくさん出てきます。これは全国にも例が少なく、貴重な遺跡といえるのです。

### 地獄の山としての立山

立山は日本の地獄の山として、今から千年少し前には全国、特に都人にとって認めら

れています。山中で噴煙を上げているところは経典にある地獄の世界ではないか、というようなことから、それまでの経典による観念の地獄から、現実存在の地獄へと認識が変わります。それによって、罪の意識、そして浄土へ、地獄へという死後の世界が極めて現実感を持っていきました。悪いことをすれば、こんな地獄へ落ちるよ、ということが、まことしやかにいわれるようになったということです。「日本の国の人、罪をつくりて立山の地獄に墮ちる」というのは今昔物語で有名になりますが、その前の1040年頃に作られた『ほんちやうほっけげんき本朝法華験記』という仏教の説話集に掲載されたものを、『今昔物語集』が採録したものです。これによって都人は、罪を犯したら立山の地獄に落ちるということが、その後の救いを求めるという信仰の背景になっています。

生前の善悪を基準とするのは「因果応報」です。しかし地獄に落ちても、罪を償えば浄土へ生まれ変わるという発想が出てきました。立山の地形を見ると、地獄谷と浄土山は隣り合わせで、同じ山中にあります。本来、地獄と浄土は天と地のはずですが、隣あって地獄と浄土がある、地獄に落ちても罪を償えば容易に浄土に救われる、この日本人の「救い」というものに対する現実的なひとつの裏付けが、立山の地獄と浄土の存在になるわけです。

### 立山曼荼羅に見る地獄世界 — 墮地獄と救済のドラマ —

「立山曼陀羅」には閻魔による裁きや、地獄谷などに連想される地獄で責め苦を負う罪人たちの様子と、雄山や浄土山に現れる阿弥陀如来たちといった極楽浄土に通じる様子がひとつの世界として描かれています。「立山曼陀羅」にも描かれるように、人は死後、生前犯した罪を「閻魔によって裁かれる」ということがいわれます。閻魔大王が一番有名ですが、その裁きは、死後7日目（初七日）、14日目（二七日）、21日目（三七日）・・・と、7日毎に閻魔大王を含む10人の地獄の王により順次裁かれるという信仰から来ています。7回目（四十九日）でも裁きが決まらない場合は、百ヶ日忌、一周忌、そして三回忌と、それまで地獄に落ちることが猶予されているのです。すぐに地獄に落とされてしまうのではなく、残された人たちの供養によって救われることがあるという考え方です。現代の仏教でも、三回忌の法要が済まないと魂は落ち着かない、といわれています。

「立山曼陀羅」の地獄世界には、女人が落ちるという「血の池」があり、ここには如意輪観音が描かれます。これは「けつぽんきやう血盆経」による教えからきていますが、池の中に生じた蓮の葉の上に女性たちを拾い上げてお救いされるという世界を描いています。

「救いのない地獄ではない」という救済の論理が日本人独特の仏教観です。これは日本人の自然観に基づき、かつまた日本人が持っている自然の中から見出した目に見えない世界、神の世界、あるいは仏の世界、その仏も決して仏典にこだわることなく、もっと大らかな目に見えない力というものの、ひとつの象徴的な形として仏を捉えているというのが、立山のすごさになります。

### 布橋灌頂会 — 女人を救う日本唯一の儀礼 —

立山山麓の芦峯寺で行われるぬのばしかんじやうえ布橋灌頂会は女人を救う日本唯一の儀式で、いわゆる女

人救済を謳っています。江戸時代、女人禁制として立山に登拝の許されなかった女人たちのための行事として発展してきたものです。明治維新の神仏分離令の影響により廃止されましたが、平成8年、130年ぶりに再現され、現在は3年に1度開催されています。

布橋灌頂会は、芦峯寺集落の閻魔堂と姥堂、その間の姥谷川（姥堂川）にかかる橋を舞台に、秋の彼岸の中日に執り行われます。参加者の女性たちは死装束に見立てた白装束で最初に閻魔堂に入り罪を懺悔します。閻魔堂を出ると目隠しをし、雅楽や<sup>しょうみょう</sup>声明に導かれながら橋を渡ります。この橋に白い布が敷かれることから「布橋」の名があります。そして渡り切った先の姥堂（現在はかつての姥堂は無くなっており、ほぼ同じ場所に建つ立山博物館の施設「遥望館」）の中に入り、説法やお札（<sup>けちみやく</sup>血脈）の授与が行われます。最後に締め切った扉が開かれ真っ暗な堂の中に光が差し込み、イメージの中で立山のご来光を拝むことで浄土への転生を疑似体験するのです。

「川」はもちろん三途の川がイメージされ、川の向こう岸はあの世（彼岸）ということになります。「橋を渡る」というのはどのような意味か、ということですが、このわずか40mの橋を、目隠しをして五感を研ぎ澄まし、ゆっくりと進む中で、自分自身が心の中に持っている様々な悩みや苦しみを懺悔していく、そして全部吐き出し終わった頃が40mの橋を渡り終えるという地点になります。そこで心の中の葛藤が浄化されて、この娑婆に生まれ変わってくる、「生まれ清まる」という体験、これをひとつの行事として用意したわけです。布橋灌頂会の良いところは、あるひとつのシチュエーションの中で、自分の心を内側に向けていき、その中で心の浄化を図るという、これを体験するということが大事なのです。

## 終わりに

富山湾と立山、これは別のものではありません。海の漁師によって山の植林活動が行われるように、海の恵みは山の恵みであり、山が穢れれば海も穢れます。山のころ、海のころ、実はひとつの世界なのです。それを形として見ると、このような色々な行事になってきますが、根本にあるものは目に見えないものに対する畏敬の念、それから様々な「他」に対する思いやり、「利他の心」、そういったものを育んできたのは、富山の豊かな森・里・海に恵まれた土地での生き方なのだろうと思います。